

Title	<學界展望>匹端と匹段
Author(s)	小野, 勝年
Citation	東洋史研究 (1962), 20(4): 507-510
Issue Date	1962-03-31
URL	http://dx.doi.org/10.14989/148230
Right	
Type	Journal Article
Textversion	publisher

う。やはり無理が伴っているようである。度量衡の單位の換算というやっかいな問題が存在するが、漢以後の各時代における一畝當りの收穫量の標準が與えられないと、當代の賦稅制の議論が空轉する恐れがある。でないと、丁對象均額の賦課と畝對象均額の賦課との比率や、當時の小作料（各時代とも收穫の二分の一位と思われるが）との比較ができず、課田と占田とのからみあい、國家權力と豪

匹端と匹段

匹端または端匹あるいは匹段という語は唐代の租稅などに關する記載にしばしば用いられ、ここに枚舉するを要しない。かつて加藤繁博士は舊唐書食貨志の譯註（岩波文庫本）の兩稅の條に「時估匹段に折納せしめん」とある匹段に註し、「匹段は布帛をいう」といい、また「錢重く貨輕きを以て、内庫錢五十萬貫を出し、兩市をして布帛を收市し、端匹毎に估（あたひ）十の一を加へしむ」の端匹に、「二丈を端と云ひ、四丈を匹と云ふ」といっている。しかしその説明は果して妥當であらうか。

絹帛四丈が匹と呼ばれたことは同志總序にも「諸州の送物……その丈尺を加え、五丈を疋となすものあるに至る。理甚だ然らず。濶さ一尺八寸、長さ四丈、文を同じくし軌を共にす。その事久しく行なわる。様を立つるの時、亦この數を載す」といって、巾一尺八寸長さ四丈をもつて疋（匹）としたことが明かである。様を立つるの時、亦この數を載すというのは暗に令の規定を指すもののごとく、通典卷六賦稅下にも、「令に準ずるに布帛は皆濶さ尺八寸、〔帛〕

族との力關係をみることもできなくなる。これは、スタイン文書の「臺資戸」の性格の解明（とくに臺資戸が一般課戸に比してどの程度有利であり不利であるのかいう點）や兩稅法成立過程の具體的な跡づけ、中國史上において完全なる土地私有制乃至國有制が存在したのか否かの検討と共に今後に残された大きな課題であらう。

（瀧波護）

は長さ四丈を疋となす、布は五丈を端となす」とある。〔帛〕は意を以て補つたが、その前文に、其絹絶爲疋、布爲端とあり、絹帛類は匹、麻布は端であらわすことが令によつて規定されていることを示している。

かくて匹端ともに巾は一尺八寸で、匹の長さの四丈であつたことには問題がない。しかし端の五丈なることについては説明を要するものがある。というのは時期によつて必ずしも一定でなかつたからである。唐六典卷三戸部によれば

其調、隨郷土所產、綾絹絶各二丈、布加五分之二、
とあり、舊唐書卷四三職官志にも同文が見られる。さらに唐六典には

唐、毎日絶絹各三丈、布加五分之二、
とも見える。ところが通典卷六賦稅の條では

唐……絶絹各三尺、布則三尺七寸五分、

となつてゐる。五分之二の計算では三尺六寸であるべきであるのに、三尺七寸五分ということになるとそれは四分之二とせねばならぬ。かかる相違は如何なる理由によるであらうか。實は仁井田陞博士もすでにこのことに觸れて、それは開元七年令と開元二十五年令

の相違にもとづくものかと繰返し注意している（唐令拾遺六六・六七〇頁）。さらに唐會要卷八三租稅上には左の記事があり、そこにも五分の一附加のことが見られる。すなわち、

武德……七年三月二十九日、始定均田賦稅、每丁歲入粟二石、調則隨_レ鄉土所_レ產綾絹_二各二丈、布加_二五分之一_一、輸綾絹_二各兼調綿三兩、輸布者、麻三斤、

とある。このとき發布された法令が武德令であるから、これもまた同令關係の文と解すべく、五分之一すなわち三尺六寸附加のことは武德令開元前令を通じて行なわれたものであって、開元後令においてはじめて四分之一と改められた。この結果、一端の長さにも當然變更があつたであらう。かくて前者が五丈一端だとすると後者では四丈八尺一端ということになつたと推定されるのである。單なる二尺の増減ではあるが、この二尺は決しておろそかにはできない。匹端上納の場合、多くの逸文では、皆隨_レ近合成となつてゐる。しかるに夏侯陽算經卷上に引用されている賦役令逸文では

若當戸不_レ成端匹_二綬_一者、皆丈尺折半之

とある。その意味は若し端匹に達しない裂や絲綿類の場合だと半分の受取勘定にするというのであらう。宮崎市定博士がかつて提唱されたいわゆる限滿法（打切り）の一種が行なわれたわけであつて、若し四丈九尺あるものでも、一尺の不足が二丈四尺五寸の計算となり、ただですら納稅の酷に苦しむものにとつて非常な不利益である。しかしかかる不合理に對してできるだけ是正を試みんとしたことが唐令改訂の精神にあつたとすると、格には端についての附屬的規定もあり、その不合理を補うための小單位も認められたであらう。そこで思いつくのが段である。

さて匹端と匹段とが同一文章内で見える一例として唐會要卷八三租稅の記事を掲げたい。

元和四年十二月、度支奏……其餘留使留州雜給用錢、即合_二委本州府_一並依_二送_レ省輕貨中估_一、折_二納匹段_一充_二、如本戶稅錢校少、不_レ成端匹_二者、任_二折_レ納絲綿_一充_二數、

すなわちここには匹段と折納して充つべしといひ、また端匹を成さざるものは云々とある。尙書省などに送る輕貨の平均價格によつて錢の代りに匹段に換算して充用するというのは、唯だ匹に換算するというだけで足りるのを語調を整えるために段を加えたのみだとして看過してしまふわけにはゆかないように考える。そこで段という文字の意味を探つてみると差當つて思ひ付くのが分段であらう。つまり均衡のとれた大きさに分割することである。段の語が不明確な概念としてではあるが、ある規準量として用いられてゐる一、二の例を掲げるならば、舊唐書卷一七下、文宗開成元年の條に、湖南觀察使盧周仁進_二羨餘錢二萬貫雜物八萬段_一と見え、新唐書卷四八百官志上林署の條にも、季冬藏冰千段、先立春三日、納_二之冰井_一、とあり、ここに萬段千段とあるが、その他賜物百段（舊唐書陳叔達傳）雜綵百段（新唐書王君廓傳）などの語の用いられた例もある。その段とは恐らく分段した量目を指していると取敢えず解釋し、かくて匹段の段もまたその意味だとすれば、具體的には二分之一乃至三分之一といったようなことが先づ思付かれ、格文が存在しないとしても五丈乃至四丈八尺一匹の二分之一乃至三分之一があつても不思議ではない。若し一着分の衣服なり、寢具なりが作れる長さならば五丈あるものでなくても二丈五尺なり、三丈二尺といった段で間に合うからである。中國側史料には残つていないけれども、そうしたこ

とが日本の場合には明確に存在している。これは固より日本獨特のものであって、唐とは無關係であると評されるかも知れないが、日本令の發達の過程を見ると全く獨自のものだともいえない気がしてならないのである。さて日本では面積と尺度の二種の段が用いられた。このうちでどちらが早いという點にも問題があるが、遺例では面積の場合は大化に遡る。すなわち大化二年の班田法において、一町が十段、一段は五十代に當り、三百六十歩となることが規定された。しかしてこの一步とは高麗尺の五尺平方であった。これに對し尺度における段はやや遅れて、和銅七年二月の制に以三商布二丈六尺爲一段とあるを初見とする。さらに養老賦役令の格文中にも段についての細則があった。このことはしばしば引用されているが、左に繰返してみよう。すなわち

和銅六年二月十九日格云、其庸布以三丁成一段、長二丈六尺、養老元年十二月二日、格云庸布、布輸二人一丈四尺、以三丁之庸布成一段、（令集解卷一三）

とある。これによると大寶令の格として庸布には二丈六尺一段と二丈八尺一段が用いられたことが知られる。前者は令に定める一端（五丈二尺）の二分の一に當り、後者は養老元年に制定された一端（四丈二尺）の三分之二に當る。令では納入の際には調庸は別々にし甲丁と乙丁が近隣關係で合せて端匹とすべきことになっている。養老元年十二月の格もまたそのように記している。しかし實際上は必ずしも便利な法ではなかった。むしろ時期を問題にしないならば一丁が負擔すべき調庸は個人でまとめて納入するほうが便利である。しかも天平八年の制では調布（二丈八尺）庸布（一丈四尺）を合せた四丈二尺一端として納入せしめることが見える、要するに先ず個人

でまとめ、さらに他のものと補い合つて成端たらしめたことを示している。加うるにかかることが、幸にも傳存する正倉院の調庸の布帛類を通じてより實證されるのである。正倉院に現存している裂類のうち墨書銘のあるものは相當數あるが、輸納の國郡戸主戸口專當官などの比較的明瞭なものは約八十點に及んでいる。古いものは和銅七年□純、新しいものでは平安に降るものもあり、天長五年庸布、天曆元年調布などがある。しかし最も多いのは天平から天平勝寶期のものである。裂の種類も多様で、綾・純・布・質布・曝布などにわたっている。そのうちから左に代表的な墨書銘を掲げてみよう。

一、調 純

土左國吾川郡桑原郷戸主日奉部夜惠調純壹匹（長六丈廣一尺九寸）
天平勝寶七歲十月 主當（國司史生大初位上田邊史祖父郡司擬少領無位秦勝國方）

一、調 布

信濃國安曇郡前科郷戸主安曇部眞羊調布壹端（長四丈二尺廣二尺四寸） 主當（國司史生正八位上中臣殖栗連梶取郡司帳從七位上安曇部百嶋） 天平寶字八年十月

伊豆國那賀郡那珂郷戸主生部直安萬呂□文部益人調□□商布壹段（長□□濶二□）

一、庸 布

上野國佐伊郡佐位郷戸主梶前部黑麻呂庸布壹段（長二丈八尺廣二尺四寸） 天平感寶元年八月（主當國司□十二等茂□郡司大領外梶前部君賀味麻呂）

一、調庸布

信濃國筑摩郡山家郷戸主物部東人戸口小長谷部尼曆調并庸壹端（長四丈二尺廣二尺四寸）主當（國醫師大初位上城上連柑足郡司大領外正七位上他田舍人國曆）天平勝寶四年十月

（松島順正編正倉院古製銘文集—書陵部紀要三號）

以上は調布・庸布・調庸布および調純の四例であつて、調布の場合、端、庸布は段を用い、おのおの巾二尺四寸、長さは四丈二尺と二丈八尺とで文獻の記載と合致している。また戸口すなわち丁によつて納入された調庸を合せて成端した場合の存在をよくに注意したい。賦役令では絹純は巾二尺二寸長五丈一尺一匹のもの、五丈二尺一匹のもの（美濃純）となつてゐるが、正倉院の純類は巾一尺九寸長六丈である。ただし、面積の上では殆んど變るところがないのはあるが、この制度に改められたのは養老三年二月のこと、續日本紀には、定諸國貢調、短絹、狹純、鹿狹絹、美濃狹純之法、各長六丈闊一尺九寸と見える。正倉院の調純墨銘は後者と合致しているが、現在のところではいまだ絹純の段なるものは文獻にも墨書銘にも存在していない。しかし六丈一匹に對し、布同様二分之一（二丈七尺）乃至三分之二（四丈）一段といったものが存在しなかつたとは保しえないのではあるまいか。さて唐令では

一、武德開元前令

調Ⅱ絹二丈Ⅱ布二丈四尺 庸Ⅱ絹六丈Ⅱ布七丈二尺

一、開元後令

調Ⅱ絹二丈Ⅱ布二丈五尺 庸Ⅱ絹六丈Ⅱ布七丈五尺

巾は一尺八寸で變つていないが、布の長さは前後相違していることは繰返すまでもない。絹一匹は四丈、しかるに布一端が常に五丈

であつたとすると四分之一附加の計算では非常に不便なものとなるから、前令では恐らく四丈八尺が一端として行なわれたものではあるまいか。かくて一端に對してはさらに、日本の場合と類似した分段法が行なわれたという推測も生れて来る。調庸を合成せず分離して納入することは當然ありうるが、その場合は成匹成端の外に半匹半端といふことが必然的に生ずることは上掲の長さから割出して明瞭である。これが一々限滿的方法で取扱われたのではたまらないし、近隣と合せて匹端を成すというのにも不便が多い。かくて、匹段という言葉の存在は匹よりさらに小さな單位として分段した長さの裂の行なわれたことを考えしめ、わが國の例から推し、唐でもそのことは無視しえないことがらのように思われる、勿論、こうしたことにはかなりの推測が加わつてゐることを自らも認めざるをえないのではあるが、かつて内藤湖南博士も別の角度からではあつたが緞子のことに論及された。

これを要するに匹端とは裂の單位を指す言葉であるが、時に絹布というのと大同小異で、横に並列したものであり、これに對して匹段のほうはいわば貫文・斛斗と同じく大小による量的な縦の關係を意味してゐるといつてよい。さて度量衡について知るところのない私が敢てこうした不文を草し、わざわざ加藤先生を引合に出すといつた非禮を行なつた所以は圓仁の求法行記にたまたま匹段なる言葉が見えているからに外ならない。彼は會昌三年七月二十五日に最愛の弟子惟曉を失ひ、その死亡届と遺品届を作成した。それは資聖寺の三綱を経て功德使に提出したものと解されるが、そこに

右弟子僧惟曉房內、除緣身衣物外、更无錢物足段斛斗等云々、とあり、その匹段の語に對して自分なりの註解を試みる必要を認めたのである。

（小野勝年）